

附属学校における教育実習のあり方を求めて(2)

—効果的な指導シート・記入シートの提案を中心に—

吉田 裕久 山元 隆春 朝倉 孝之 岡本 恵子 新治 功
末廣 鈴江 土本 勝彦 西原 利典 三根 直美 宮本 浩治

はじめに—教育実習強化の動向と課題—

1 教育実習の強化—中教審答申—

平成18年7月11日、中央教育審議会から「今後の教員養成・免許制度の在り方について」が答申された。学校教育、教員・教職(養成も含む)のあり方に対する世論の注文・要望を反映する形で、こうして政策として具現化されることになったのである。

そこでは、教員養成・免許制度に関する改革について、①教職課程の質的水準の向上—学部段階で教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせる—、②「教職大学院」制度の創設—大学院段階でより高度な専門性を備えた力量ある教員を養成する—、③教員免許更新制の導入—養成段階を修了した後も、教員として必要な資質能力を確実に保証する—が重点項目として取り上げられた。「教職大学院」の創設、免許の10年更新制については、これまでなかった新しい試みということでマスコミ等でも様々に話題にされた。そうした中で、①教職課程の質的水準の向上についてはそれらの陰になった感があるが、その具体的な施策の中に、教育実習の充実・強化について取り上げられたのである。中心となる2点を抽出する。

1点目は、教育実習の実習内容についてである。

○教育実習における実習内容は、学校における教育活動全体を視野に入れることが基本であるが、学生の履修履歴や免許状の種類に応じて、例えば、授業実習の比重を高めたり、学級経営の比重を高めるなど、実習内容を重点化することも考慮する必要がある。なお、その場合でも、教科指導の実践は教育実習の最も重要な内容であることから、課程認定大学は、学校や教育委員会と協力しながら、十分な授業実習の機会の確保に努めることが必要である。

(p. 17, 下線は引用者、以下同じ)

「教科指導の実践は教育実習の最も重要な内容であ

る」「十分な授業実習の機会の確保に努める」として、教育実習の実習内容における授業実習の位置づけの再確認、授業実習の機会の確保を強調している。教育実習のあり方について、私どももこの方向で異論はない。また、すでにこのように進めてきている。授業実習の機会を確保し、授業実習の充実・深化のため、その工夫に取り組んでいる。

2点目は、大学と実習校との協力・連携についてである。

○教育実習においては、課程認定大学と実習校の協力により、授業案を作成したり、教材研究の指導を行うなど、大学の教員と実習校の教員が連携して指導に当たる機会を積極的に取り入れることが必要である。(略) (p. 17)

大学教員と実習校教員との協力・連携の強化が示され、具体的には授業案の作成、教材研究の指導が例示されている。これら教材研究の指導、授業案(学習指導案)の作成についても、実習校で授業実習の最重要内容として細かな指導を行っている。大学の関与の仕方は引き続き検討課題となっている。

2 指導シート、記入シート導入の試み

こうして、教育実践力の向上を目指した教育実習強化の方向が打ち出された。私どもは、この動向を言わば先取りする形で、教育実習のあり方を考え続けてきた。とりわけ実習生が教壇で行う授業実習の充実・深化を目指してその効果的なあり方を希求してきた。その一環として、指導教員が実習生の状況について記入する「指導シート」、各実習生が自分自身の状況について記入する「記入シート」の機能・効果に着目した。この双方向で、しかも記述という内省を伴う方法を導入することが、教育実習の充実・深化を保証するとともに、実習生の授業力を高める上で効果的な働きをすだろうとの仮説から、この営みを導入したものであ

る。以下に、その分析・検討について具体的に記すことにする。(吉田裕久)

広島大学附属中高等学校における指導シート・記入シート実施の試み

1. 目的

教育実習における指導シート(指導教員が各実習生について記入するもの)と記入シート(実習生自身が記入するもの)の使用・検討を通して、附属での教育実習の効果をあげる。

2. 方法

それぞれのシートの実際を明らかにした上で検討をし、その効果、課題を探り、解決策を探る。

3. 指導シートの検討

3-1 指導シートの内容

2005年度の指導シートは、

- ①授業で何をしたいのか、その目標など
- ②教材分析
- ③教材・資料・学習プリント等の作成
- ④授業構成
- ⑤話し方・生徒との対応・ふるまいなど指導力
- ⑥実習に臨む態度・姿勢
- ⑦その他

の項目を設定し、

- ・問題だと感じられた点
- ・そのことに対する指導内容
- ・その結果どう改善されたか/改善されなかったか(改善されなかった場合はその理由も入れる)

という一連の流れで書き入れるものだった。これは、漠然としていて全体像が見えにくい、書く時期として、後で書くのは分量的にも時期的にも困難である等の問題があったため、今年度は、次のように改善した。

(1) 時期の細分化

A 事前指導 B 事後指導(主に批評会へ臨む態度・姿勢等の記録) C 授業の実際

実習生指導シートA面

| 項目 | 事前指導 | 事後指導 | 授業の実際 |
|-------------------------|------|------|-------|
| 1. 授業の目標 | | | |
| 2. 教材分析 | | | |
| 3. 教材・資料・学習プリント等の作成 | | | |
| 4. 授業構成 | | | |
| 5. 話し方・生徒との対応・ふるまいなど指導力 | | | |
| 6. 実習に臨む態度・姿勢 | | | |
| 7. その他 | | | |

実習生指導シートB面

| 項目 | 事前指導 | 事後指導 | 授業の実際 |
|-------------------------|------|------|-------|
| 1. 授業の目標 | | | |
| 2. 教材分析 | | | |
| 3. 教材・資料・学習プリント等の作成 | | | |
| 4. 授業構成 | | | |
| 5. 話し方・生徒との対応・ふるまいなど指導力 | | | |
| 6. 実習に臨む態度・姿勢 | | | |
| 7. その他 | | | |

(指導シートA面：A事前指導 B事後指導 を記録)

(2) 項目の具体化

Cの授業の実際での項目を、①教材分析・教材研究②指導案の作成③本時の目標および評価方法と評価計画④授業の構想・展開⑤発問の設定⑥板書計画⑦教材・資料・ワークシート作成⑧学習活動の工夫⑨学習者の反応⑩話し方・ふるまい方⑪その他(文字・語彙・文法、人権に対する意識、ワープロ・パソコン・VTRの利用・操作等々)とした。

(3) 全体像の把握

B4一枚の裏表で、二週間の実習中、当該実習生の持つ課題、その改善等が見える形とした。

実習生指導シートB面

| 項目 | 1週目 | 2週目 | 3週目 | 4週目 | 5週目 | 6週目 | 7週目 | 8週目 | 9週目 | 10週目 |
|-------------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 1. 授業の目標 | | | | | | | | | | |
| 2. 教材分析 | | | | | | | | | | |
| 3. 教材・資料・学習プリント等の作成 | | | | | | | | | | |
| 4. 授業構成 | | | | | | | | | | |
| 5. 話し方・生徒との対応・ふるまいなど指導力 | | | | | | | | | | |
| 6. 実習に臨む態度・姿勢 | | | | | | | | | | |
| 7. その他 | | | | | | | | | | |

(指導シートB面：C授業の実際 を記録)

3-2 指導シートの効果と課題

今年度実際に指導シートを使用しての効果は、次のような点が挙げられる。

- ・これまで教員ごとであった指導観点が、「指導シート」に項目を明記することで、互いに共通認識を持つことができる。
- ・各授業時間ごとに適宜書き入れていくことで、リアルタイムで前時との比較ができる。
- ・実習生への指導が全体を見通して、ある程度均質なバランスがとれた指導ができる。
- ・裏表の一枚で実習生一人分の評価がなされているので、客観的・具体的に課題や向上がわかり、次の実習への橋渡しができる。

ただし、次の課題が残った。

- ・個体の変容を見ようとして、実地授業5時間分の記録を一枚のシートにしようとしたため、記述スペースが狭く書きにくい。
- ・観察観点別に区切られているため、多項目に亘る事項をどう記載すればよいか迷う、これまではメモ書きで良かったものが他者に見せることで、丁寧に記載しなければならぬなど、シートに記述することばかりに気を取られ、授業観察に支障をきたす。
- ・前期に本校で実習を受けた学生の指導シートが、後

期の実習にどう活かされたか、活かされなかったのかフィードバックできていないため、その効力が実感できず記述する意義をそれほど見いだせない。

3-3 指導シートの改善案

「指導シート」が考案された当初の目的は、ある実習生にどのような課題が認められ、その課題に対しどのような指導が施され、変更があったのか、なかったのか、他者が目で見てわかるような形で記録し複数の指導者が共有することで、指導の効果を高めることにあった。

しかし一方で今年度が二年目であり、昨年度のものからいくらか改善を加えたにもかかわらず、依然として使いにくく、またその効果もあまり見出すことができなかった。

そこで原点に立ち返り、前期の指導と後期の指導を繋ぐより効果的な方策として何が必要かを考えた。

4週間実習が導入された過去二年間、前期に他校で実習を受け、後期本校に実習を受けに来た学生に、最初の顔合わせ、打ち合わせで何を尋ねてきたか振り返ると、概ね次のような点である。

- ・何年生の授業を受け持ったか。
- ・何時間実習したか。
- ・どの領域で何を教材として、どのような学習活動を展開したか。
- ・前期実習で何を学んだか。
- ・前期実習で何を身につけたか。
- ・前期実習で見出した課題は何か。

もちろん上記の点は事前調査で実習生自身に記述させるのであるが、自己評価と指導教員のそれとでは差異がある場合もある。よって前期の指導教員がその学生をどう評価したかも情報として欲しいわけである。

そこで「指導シート」が登場するのであるが、もっと簡潔で、もっと後期の指導上の課題が明確になる様式にならないかと考えた。いわゆる「カルテ」のようなものである。それもA4版一枚程度の少量のものである。

具体的には次の様式を提案する。(様式1)

A面とB面の評価項目を整理して、

- ①単元の趣旨・教材観
- ②指導(学習)計画
- ③教材分析
- ④指導案
- ⑤発問
- ⑥板書
- ⑦授業の展開
- ⑧学習者への反応・対応

(様式1)

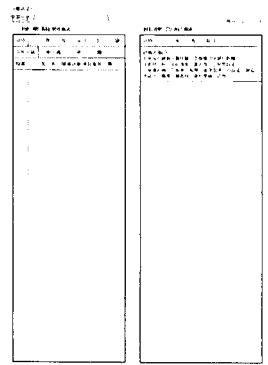
⑨話法・態度

⑩教材・資料準備, 活用

の10項目とし、それぞれABCの3段階で評価する。また、本実習において評価すべき点と本実習において課題と思われる点について詳述する欄を設ける。この書式によって、事後の記入内容が、各時間毎の課題ではなく、実習全体の経過を踏まえてまとめた課題になる。また、評価項目に照らし合わせて記入することが可能になり、より効果的に前期と後期をつなぐだろう。

では、これまでの「指導シート」は活かすことができないのか。先に挙げた使用しづらい点に改善を加えたものが「様式2」である。

「様式2」は毎時一枚ずつ、備忘録として扱う。縦長に二つ折りにして、左半分は授業中に指導案と並べ使用し、気づきを記述していく。右半分は各授業後の批評会で、授業者や観察者の発言等を記録する。指導教員が自身のために使用するものであり、他者に提示することはないので、メモ書き程度で十分とする。また実習終了時点で、それまでのものを重ねることで変更をみることもできる。



(様式2)

実習終了後、「様式2」を備忘録として「様式1」を清書する。こちらは実習生の評価票、他附属への連絡票、実習校での保存用として活用する。

4 記入シートの検討

4-1 記入シートの目的

実習生を見ていく中で、全体的な課題として、

- ・(実習前に)自分ができていることとできていないことをメタ認知できていない。
- ・(実習中に)実地授業に対する課題も明確にできない。というものがある。そのことを踏まえ、本校で実習生に課している記入シートは、以下の通りである。

- 教育実習打ち合わせから実習前まで
 - (1)国語科教育実習日誌(大学側より要請されたもの)
- 実習中
 - (2)教育実習に関する事前調査
 - (3)国語科授業観察録
 - (4)中間自己評価票
- 実習後
 - (5)教育実習に関する調査

(6)感想文

(7)実地授業記録

(2)は、実習初日に実習生自身が自分のあり方を振り返り、整理するためと、指導教員が実習生の準備状況と課題を把握するためである。教材研究や指導案作りにかけた時間、頻度、具体的にした教材研究の中身、指導案作りを通して感じたこと、授業準備を通して感じたことを具体的に記入する。

(3)は、本校において全教科の実習生が使用している授業観察録の書式を変えたもので、一時間ごとの授業(実地授業も観察授業も)の記録シートである。左側には、授業者の活動と学習者の活動を書く欄と、板書を書き入れる欄がある。右側は、観察者・授業者がそれぞれ、教材研究・教材分析、授業の構成、発問・説明、指導の技術、板書・メディア・教具、学習者の把握と指導への反映、の項目別に書き込むようになっている。

また、批評会の記録として、授業者自身の振り返り、質疑応答、協議内容、指導教員講話、と柱立てしている。

(4)は、今年度新たに導入したもので、実習が一週間程度たった時点で、実習生自身が自己を振り返り、課題を明確にし、残りの実習を効果的にするためのものである。

| 国語科教育実習 中国語科評価表 | | 実習生名() | |
|-----------------|-------|----------|-----|
| 10月11日(月) | | 指導教員名() | |
| 時 | 分 | 観察者 | 授業者 |
| 10:00 | 10:10 | | |
| 10:10 | 10:20 | | |
| 10:20 | 10:30 | | |
| 10:30 | 10:40 | | |
| 10:40 | 10:50 | | |
| 10:50 | 11:00 | | |
| 11:00 | 11:10 | | |
| 11:10 | 11:20 | | |
| 11:20 | 11:30 | | |
| 11:30 | 11:40 | | |
| 11:40 | 11:50 | | |
| 11:50 | 12:00 | | |

(5)は、アンケート形式で実習全体を振り返って細かく聞くもので、国語科における教育実習についての成果・課題を把握するものである。昨年度実施したものとほぼ同じ書式であるが、質問項目に改変を加えている。後述する質問9について、前年度は「困難に感じたことは何か。」とたずね、教科指導に関する面、その他の実習環境面をあわせて、あてはまるものに○をつける形式としていた。今年度は、困難に感じたことは実習環境面にとどめ、教科指導に関する面については、実習生がどのくらい達成できたととらえているかをたずね、それを集約することによって、実習を終えて実習生の課題意識がどこに向けられているかをとらえることにした。

(6)と(7)は、昭和49年度のものが保管されていることから、そのころからずっと引き継がれているもので、(6)は1600字の原稿用紙に記入し、(7)は、B5半分程度の分量で、実地授業一時間ごとに目標と反省を書き込むものである。本校の教育実習を締め括るものとし

て確立している。

4-2 記入シートの実際とその検討

(1)は、記入されている様子を見ると、その日にやったことをおおまかに記録しているだけで、具体的にはほとんど書かれていなかった。

シートには、【問題分野】として、項目が様々に指摘されている。

A.【単元の構想グループ】 ①単元の趣旨、②指導(学習)計画、③学習者観、④教材観、⑤教材分析、⑥評価計画(学習指導要領との関連)

B.【各授業の計画・準備グループ】 ⑦教材・資料作成、⑧本時の目標および評価方法と評価規準、⑨授業の展開、⑩発問の設定、⑪板書計画、⑫学習活動の工夫、⑬指導案の作成⑭学習者の反応およびそれへの対応、⑮話し方・ふるまい方

にもかかわらず、これが生かされた記入になっていない。

(2)は、本来(1)を見ながらまとめていくべきものなのだが、(1)がおおまかな記述で役立っておらず、記入するのにかなりの時間を費やしていた。その間に実習生同士が話し合い、他人の準備状況を把握する機会になっていたのは思わぬ効果だった。(1)が意味のあるものとして機能するためには、教材分析として、どんな文献に当たったのか、何をどこまでして、それはどの程度できたのか等、具体的にメモしておくことよだろう。そうすれば、(2)はもっと簡単にまとめられるし、重複する点は削除していくこともできる。

(3)については、記入の仕方を教員が指導していない結果、メモを取ることに終始してしまい、観察録が効果的なものとして機能していない実態があった。指導案が配布されていることが多いので、指導案に書かれていることについては記入する必要はない。

また、授業のメモをとった後、批評会までに課題を整理していくための右側の欄がほとんど記入されていない。

教育実習生がよりよい授業を作っていくうえで見落とすことができないのは、批評会の存在である。批評会とそれを受けての事前準備こそが授業を支える核心であり、そのサイクルによって実習生の授業は着実に向上していく。その意義は次の5点に大別される。

1. 自分の課題の認識
2. 授業批評力の養成
3. 班員との協力による課題解決
4. 班員からの批評
5. 指導教員からの助言

中でも、最後の項目については、次時の授業を構想していくためにも、毎時間メタ認知されなければなら

ない部分であり、指導教員としても明示するように心がけている。次の感想はそのことを裏づけている。

授業の参観者一人一人から反省点を聞くことができたから。班員以外の人の新鮮な批評は勉強になりました。また、指導が適確で次時の目標をはっきり示して下さるので、課題がわかりやすかったです。〈(5)教育実習に関する調査 質問7「批評会を充実していたと思う理由」より〉

しかし、実習生が記入する批評会記録は、その意義が反映されているものになっていない。批評会での実習生の様子を見ると、メモを取ることに終始しているように感じられた。実際の記入状況を見ても、そのことがうかがえた。これでは、批評会で明らかにされた課題が次へつながっていきにくい。批評会を終えた後で、改めて次時への課題を整理させる場面が必要であり、それに応じた書式を設定する必要があるだろう。

(4)について、その回答結果は以下のようになった。なお、中間自己評価表の項目の番号については、(5)教育実習に関する調査の質問9の項目番号と対応させた。なお評価は5が高く、1が低い。

(中間自己評価表) 後期実習

| 評 価 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|--------------------|---|---|----|---|---|
| ⑤教材分析・教材研究 | 4 | 4 | 7 | 2 | 1 |
| ⑦教材・資料・ワークシート作成 | 1 | 7 | 6 | 4 | 0 |
| ⑧本時の目標および評価方法と評価計画 | 2 | 8 | 4 | 4 | 0 |
| ⑨授業の構想・展開 | 1 | 8 | 8 | 1 | 0 |
| ⑩発問の設定 | 3 | 9 | 5 | 1 | 0 |
| ⑪板書計画 | 3 | 6 | 4 | 5 | 0 |
| ⑫学習活動の工夫 | 0 | 2 | 10 | 3 | 0 |
| ⑬指導案の作成 | 2 | 5 | 7 | 3 | 0 |
| ⑭学習者の反応およびそれへの対応 | 1 | 7 | 9 | 1 | 0 |
| ⑮話し方・ふるまい方 | 0 | 6 | 8 | 4 | 0 |

多くの実習生が課題意識を持っている項目は、1と2の評価の数を比較すると、⑤⑧⑨⑩⑪で、本校での実習の中に授業をしていく際に大切なことが自覚されているということであろう。

(4)のシートは、実習生自身の課題をメタ認知させる上で非常に有効なものであると考える。むしろ、実習の中で指摘された自らの課題をじっくりと捉えなおす場面が今までになかったことは、反省すべき点である。実習期間中ということもあり、多くの分量を書かせることは負担が大きいので、それぞれの項目について簡単に振り返りながら、意識化させるものとして、大変効果的であった。

(5)の調査(後期実習)の中から、

質問9 教育実習中、授業を実施するためのどのような力が身に付いたと判断できるか。それぞれについて回答せよ。

を取り上げ、集計した結果が以下のとおりである。

| 評 価 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|--------------------|---|----|----|----|---|
| ①単元の趣旨 | 0 | 2 | 5 | 13 | 0 |
| ②指導(学習)計画 | 0 | 2 | 9 | 8 | 1 |
| ③学習者観 | 0 | 4 | 6 | 8 | 2 |
| ④教材観 | 0 | 1 | 6 | 13 | 0 |
| ⑤教材分析・教材研究 | 1 | 2 | 5 | 10 | 2 |
| ⑥評価計画(学習指導要領との関連) | 4 | 10 | 5 | 1 | 0 |
| ⑦教材・資料・ワークシート作成 | 1 | 5 | 6 | 7 | 0 |
| ⑧本時の目標および評価方法と評価計画 | 0 | 6 | 10 | 4 | 0 |
| ⑨授業の構想・展開 | 0 | 3 | 5 | 9 | 2 |
| ⑩発問の設定 | 0 | 6 | 6 | 6 | 2 |
| ⑪板書計画 | 0 | 5 | 6 | 9 | 0 |
| ⑫学習活動の工夫 | 0 | 6 | 9 | 5 | 0 |
| ⑬指導案の作成 | 0 | 2 | 13 | 5 | 0 |
| ⑭学習者の反応およびそれへの対応 | 0 | 4 | 10 | 4 | 2 |
| ⑮話し方・ふるまい方 | 0 | 4 | 9 | 5 | 2 |

本校での実習を終え、身に付いていないと多くの実習生が感じている項目は、1と2の評価の数を比較すると、⑥と⑧、⑩と⑫である。

⑥と⑧については、本校で特に意識して指導していない項目として挙げられる。この原因として考えられるのは、本校の指導教員が、目標と評価は一体化されたものとして自明のことと考えているがために、指導事項として意識化されていないということである。もちろん、実習生の実態として、いくら事前に模擬授業を積み重ねていても、現場において実際の生徒を目の前にしなければ、書くことが難しいということもあるだろうが、学部教育における指導の充実が求められることを表しているのではないだろうか。

⑩と⑫については、実習期間中、重点的指導事項の一つとして各指導教員が取り上げていることではあるが、一朝一夕にできるものではない。特に発問については、実習生が教員になった後も研修を重ねるべき、言わば教員生活終生の課題となっていくものだろう。

(5)の調査は、今年で2年目となるが、継続的に実施し、比較、検討を行い、問題点を明らかにしていく指針として、十分役立つものと評価できよう。

(6)で、実習全体を通して感じたことや学習したことを振り返るとともに、(7)で個々の授業について反省するというスタイルは、振り返りとしてバランスが取れているのではないだろうか。実習後には何らかの形で実習期間中の自分を評価することが必要だが、(5)は本研究のために始めたアンケート書式であり、質問ごとに簡潔に記入するという点から考えても、実習のま

とめとしては不適切だろう。やはり、ある程度の分量を記述させる必要がある。その意味で、(6)と(7)を併せ記述することが望ましいと考える。実習期間中の学習成果および自己の授業を、少し時間をおいて振り返るという効果もあると言えよう。

4-3 サンプルによる記入シートの実際とその効果

(1) 前期実習との連関から見た課題

後期実習では、今年度初めての試みとして、前期実習校から「自己評価録」「指導教員による評価録」が送られてきた。前期と後期をつなぐものとして、大学側が作成された様式である。この中から、特に教育実習生Aさんをサンプルとして取り上げ、その実際を検討する。

Aさんの前期実習での「自己評価録」には、次のような記述がなされている。(下線は、稿者による。)

自分で教材の内容を理解するだけでは不十分で、それを通じて何を伝えていくか、それをどのように伝えるかも考慮しながら分析する必要があることがわかった。 <『自己評価録』「⑤教材分析」より>

同じグループの人と何度か勉強会をもったが、私が授業をする側としての視線を失ったまま、教材研究をしてしまったために、納得のいく教材研究ではなかった。なんとなく理解していたところが多く、実際授業を行って説明する時になって、思うように学習者に伝わらないところがあり、自分で理解することと、説明することの違いを感じ、難しさを知った。 授業をする視点で細かく考えて読んでいかなかったため、実際に授業案を練る段階になって、もう一度読みを確認するようなことをしてしまい、時間を有効に使えなかった。また、実習の途中で読みが変わるなどということもあったのが残念であった。 <『自己評価録』「授業実施において準備不足を感じられたことは何か」より>

下線部の記述に見られるように、自分の考えていた教材分析と求められる教材分析との違いに気づき、教材分析の必要性が実感されていることは評価されるべきことであろう。

この教材でどのようなことを問題として扱い学習者に考えさせていくのか、ということについては理解できたように思う。

<『指導教員による評価録』「④教材観」より>

当初は教材としての分析が不十分であったが、初め

での教材分析であることから、指導教員が指導するうちに内容の理解はできたように思う。ただ、何をどう提示して授業を構築していくか、そのための授業者として深い読み、そのための教材分析が十分であったかと言われると、何とも言えない。

<『指導教員による評価録』「⑤教材分析」より>

作品の説明はできていても、授業を前提とした分析はできていなかった。どこで読みをつまづき、どの表現で読みが転換し、どういう過程を経て結論に至ったのか、授業で学習者に仕掛けていく分析が曖昧で、実習中に大きく方向転換した。

指導項目の意義について理解していなかった。実習中に「なぜこのことが大切なのか」「この観点はなぜ必要なのか」指導教員なりにいろいろと指導したが、二週間の時間では、まだ充分に実践できるまでには至らなかった。

<『指導教員による評価録』「授業実施において準備不足の感じられたことは何か」より>

しかしながら問題は、波線部に見られるような指導教員の評価とは違って、Aさんは自己評価において、「教材分析」に関係する項目には、全ての項目で「概ね理解」できていると自己評価していることなのである。つまりAさんは、教材分析についてはできるようになっているという自負を抱いているという問題が、後期の教育実習において露呈することになるのである。

(2) 後期実習における自己認識の変容

前期に教育実習を行った教育実習生に対して、教育実習指導を行う際に気を付けることは、教育実習を通じて、自分の課題が何であるのかを的確に把握できているかどうかである。Aさんの場合、前期の教育実習を通じて記述された『自己評価録』をもとに、教材研究に問題があると分析し、指導をしていくことにした。

しかしながら、事前指導の際、あるいは実習開始時に話を聞いていくと、Aさんの場合、教材分析に対する課題よりも、「国語の授業の成立」に向けた取り組み、あるいは「国語の授業とは」という授業観の変革が目指されなければならないことを痛感させられることになった。具体的には次の記述を参照すると、Aさんの意識を垣間見ることができよう。(下線は、稿者による。)

今回の実習で一番考えが変わったのは国語科の授業観でした。私は楽しい国語の授業がしたいというように考えていました。そのために、グループワー

クをさせたり、周囲の人と話をさせたりとできるだけワイワイとした(稿者注…子どもたちの発言が多く、活気のある)授業になるようにしたいと考えました。こういう授業が私にとって、楽しい授業だと考えていたからです。

しかし、実際には生徒たちは一人での作業に夢中になり、グループで話し合いをさせても考えが私が思う程には深まったりはしないことに気がきました。集団で仲良くしたり、賑やかな授業が良い授業なのではないことを知りました。決してグループワークが悪いのではないのですが、何のためにするのかという目的が大切だと感じました。

国語科というのは、教材を教えるのではなく、教材で教えるということは分かっていました。しかし、そのことを十分に認識していなかったように思います。B先生は、常に深い思考という言葉をおっしゃっていましたが、その言葉の意味を今回の実習で授業を通して身を持って感じました。生徒たちを深い思考に導かせることが、国語科に求められていることであり、生徒もそれを望んでいるのだと思えるようになりました。深い思考へもっていきける質の高い授業を行えるようになりたいです。そのための教材分析も惜しまないように心がけたいと思います。

〈(6)感想文より〉

以上の記述からもわかるとおり、後期の教育実習の当初、Aさんの意識は「よりよい授業とは何か」ということに向けられ、「授業の現象」にだけ目が向けられていたことを確認することができる。教育実習生に対して、国語科の授業観を形成させることは大切である。

しかしながら、「授業の成立」の要件を探ることが第一であるとは言うまでもない。Aさんの場合、「授業の成立」の要件として、教材分析に目が向けられていくことになったことは学びの成果であったということが出来る。また、このような教育実習生の実際を見ると、「活動あれども、学習なし」という授業が多く見受けられるが、「学習の質」をどう捉えていくのかが、大学や実習を通じての教育において、重視される必要があることは課題として挙げられる。

また、国語の授業に対する意識は、自己の授業実践の振る舞いに対する反省に向けられることになることは必然である。Aさんは、前期の教育実習の反省点として、次のように記述している。

教師という教壇でたって話をする立場である以上、話し方の上手い下手は重要であると思った。もちろん、技術的な面だけでなく、誠意によってそれは補

えるだろうが、もっと話し方の訓練をすればよかったと思う。元来、自分は話すのが上手ではなく、早口であることは自認していたのだから、本格的なトレーニングとまではいかないが、発声の本を読むなどして訓練を積んでおけば良かったように感じた。〈『自己評価録』『授業実施において準備不足を感じられたことは何か』より〉

Aさんの意識は、前期教育実習終了時において、自分の指導言に向けられていることが読み取れよう。すなわち、Aさんにとっては、教材分析に対する課題は忘却され、授業を上手に行うための方法や技術に意識が向けられるようになっていた。また、事前指導においてAさんは、前期実習で、「指導教員に、授業が暗いという批評をされたことが一番心に残っている」と語り、「授業を上手にしたい」という思いが語られた。このことは、「授業の良悪」の基準だけが、前期の教育実習においてAさんの中に蓄積されたことを物語っていると同時に、前期の指導教員の思いが汲み取られていない現実を照射する結果になっている。

このことは、以下の記述を見ても明らかとなるであろう。

単調な授業にならないように作業や音読を入れていったが、それだけで切り抜けられないようにも思い、面白い授業になるためには何が必要なのかわからなかった。

〈(2)『教育実習に関する事前調査』より〉

前期に潜在的に意識化された「単調な授業」ということば。「単調な授業」ということばの反対に位置付けられる「賑やかな授業」という価値意識が、「授業の成立」、あるいは「授業の成立の背後にあるもの」という意識をすり抜け、現象にだけ、目を向かせる要因となったことは、想像に難くない。

しかしながら、後期の教育実習においては、先述した指導目標のもとに、実習を行った結果、Aさんには次のような自己認識の変容がもたらされることになった。

今回の教育実習を通して様々なことを学ぶことが出来ました。主に教材研究と国語科というものについて考えが深められたと思います。

まず、教材研究の重要性について痛感しました。批評会では、発問や生徒の発言への対応、振る舞いの余裕のなさなどを指摘され、それらは全て教材研究の不十分さから生じるものであることを指摘され

ました。しかし、どこまで教材研究をすれば十分なのか、実習の途中で分からなくなりました。結局、自分では内容や教えることをわかったつもりでも、授業が曖昧になったりしています。ある日の授業中、生徒の突然の質問に答えられないことがありました。その質問に、先生の力を借りて、一晩かけて考え、ようやく回答をすることができました。自分の教材研究の甘さを痛感しました。私は教材研究はどこまでもしないといけないものであり、教材だけでなく、教えるために必要なものは全て理解する必要を思い知らされました。それが授業に反映されてもされなくても関係ないのです。

また、今回は生徒たちに班で活動させて発表をするよう指示しましたが、生徒たちの発言を活かすことが出来ませんでした。生徒の発言が全く見当がつかず、自分の授業案通りにまとめられるか怖くて生徒に発言を促すことが出来なかったからです。その原因も教材研究がしっかりしていないからだと指摘されました。B先生の授業を観察させていただいて、そのことがよく分かりました。先生は生徒の言った言葉を上手に汲み取って、黒板の適切な箇所にはめていく姿には感動しました。先生の中で教材や教えたことがきちんと整理されており、生徒が授業を通して考えを深めていくのが見て分かりました。先生は教材や教えたことをしっかり把握し、それらを一旦ばらばらにして、生徒の思考に合わせて、それらを再構築して授業を作っているように見えました。そのため、生徒のどんな発言にも対応できるのだと思いました。私は授業の流れを一つと決めて、そこへ向けてしか授業を進めていくことしか考えていませんでした。そういう意味では、私の教材研究は、自分の授業を成立させるためのものでしかなかったと反省しています。今後は、生徒と共有できる授業のための教材研究をしたいと思いました。

〈(6)感想文より〉

Aさんの記述した(6)感想文には、教材分析との関係の中で、実地授業の反省が綴られていることに気付かされる。すなわちAさんは、後期実習を通じて、教材分析についての自分の課題を明確に意識し、同時に「授業の成立」は教材分析の深浅によって左右されることを認識させられることとなったのである。また、(4)中間自己評価票においては、「授業の構想・展開」の項目において、次のような記述を行っている。

目先の面白さというものにとらわれていたけど、思

考のための授業の流れを少しは考えられるようになった。自分が何を理解し、何を伝えたいかを頭に入れながら、教材について分析したものが、授業に反映されていくことがわかった。

当然、授業後の批評会でも、授業構想の妥当性が教材分析との整合性を意識して発言されるようになり、授業も「単調なもの」ではなく、甘さは残るが、授業として成立していたことは言うまでもない。

4-4 記入シートの改善へ向けて

今回、一番改善すべきものとして(3)の授業観察録について提案したい。それは、次のようなものである。

まず、批評会を生かしていくために、「批評会を終えて」という項目を設けた。記入する内容としては、批評会を通じて明らかになった自身の反省・課題、方向性等を想定している。これは、自らの課題を内面化させることをねらったものである。批評会を通じて明らかになった自身の課題をその時だけの記憶とするのではなく、記録に残すことによって、今後の指針にすることができると考えた。

また、授業観察録の記入に際しても、事前に書き方を指導しておくことがいる。さらに批評会で求める観点も事前に指導しておくこと、実習生が意識して臨むことができ、より効果を挙げていこう。

- その観点としては、次のことが挙げられる。
- ・批評会に臨むにあたって、授業の課題や問題点をしっかり指摘できたか。
 - ・自分の授業のことと比較しながら、意見や感想が述べられたか。
 - ・ただの印象や感想にとどまらない、改善策など発展的な意見が述べられたか。
 - ・批評会を、自分が主体的に進めようとしているかど

(今年度使用したもの)

(変更案)

うか。

批評会に臨む前に、意見をまとめておくことができる欄を設けているが、実際には活用されていないという実態があるので、その部分の指導が必要であろう。またそれは、自身の授業にも様々な面で役立っていくはずである。

また、批評会で協議された中心テーマを書く欄を設けた。これは、その授業の中で改善していくべきことの中で、最も大事な部分について意識化させるものである。テーマは、実習班のメンバーで設定することも、指導教員から与えられることもあるが、いずれにせよ、批評会の記録が、さらには批評会そのものが散漫になるのではなく、焦点化されることが期待できよう。さらには、あとの記録としても役立つのではないか。

5 今後の課題

広島大学の教育実習プログラムの大きな特質の一つに、前・後期制を採用していることが挙げられる。教育実習に前・後期制を採用している広島大学の教育実習プログラムは、広島翠地区、広島東雲地区、福山地区、三原地区、東広島地区に、11校園という、他に類を見ないほどの数の附属学校を有する広島大学ならではの特質であると言えることができるであろう。また、広島大学の教育実習プログラムの利点は、前期の教育実習を通じて、教育実践上の自分の課題を認識し、後期の教育実習に臨むことができるという点に存在している。

今回、指導シートと記入シートについて検証していく中で、その有効性は、まさにその利点を生かすことができる点にあることがわかった。指導教員のコメントと実習生本人のコメントをすり合わせることで、実習生の前期の実状が浮き彫りにされる。

もちろん、シートの有効性はその点のみにとどまらない。それは、大きくまとめれば「意識化」と「共有化」ということになるだろう。

「意識化」とは、このシートによって、実習期間中に、実習生には自らの課題をメタ認知させることができる、あるいは、指導教員が自身の指導を振り返ることができるというものである。こうした意識化は、次の授業、次の指導に即時的に生かされていくであろう。さらには、実習後にも、実習生が自身の課題を記録として振り返ったり、指導教員が実習生の評価に直結させたりするなど、様々な活用させることができる。

「共有化」とは、前述の、実習生の前期の実状が浮き彫りにされることに象徴されるように、附属間での情報共有が、後期実習をさらに実りあるものに見込めることである。今までの実習は各校園が

それぞれ独自に行っており、それらが相互に交わることはなかったが、その連携を十分に取ることが、実習の成果をあげていくことになるだろう。さらには、記入シートおよび指導シートによって明らかにされる実習生の課題を、大学と共有化することによって、大学での指導に還元されていくことも期待できる。その意味で、共有化のメリットは大きい。

しかしながら、これらの有効性を実のあるものにさせるためには、附属学校間・あるいは大学と附属学校間の連携体制の強化、教育実習指導体制の充実、カリキュラムの開発意識が共通のものとして明確に認識されていることが欠かせない。4週間実習が導入され、さらに前期と後期で受講する学校が異なることで、実習指導の一貫性、整合性、統一性がより求められるようになる。大学の学部教育の充実、とりわけ前期の指導と後期のそれとをどう繋ぐか、一人の実習生を複数の附属学校、複数の指導教員でどう連携しながら伸ばさせていくかが新たな課題となる。

また、その前提として、附属学校内における指導教員間での共有意識という点も課題として存在している。これまで、指導教員は、各自の観点で実習を評価し、実習生の授業力を高めるべく指導を施してきた。しかしそれは各自の指導法として閉じられたものであり、同一学校内で相互に共有されたものではなかった。指導期間中のそれぞれの忙しさの中で、実習生の実態、個々の指導の方策について情報交換をする機会を持つことが難しかったのだが、先に述べた本学の教員実習の利点を生かすためには、まず指導教員間の指導をお互いに交流させていくことが求められていると言える。現在各指導教員に委ねられている批評会の具体的な内容を公開・検討していくことも一考である。

以上の連携によって、この記入シートおよび指導シートを、附属学校だけでなく、教育実習を実施するにあたり指導法を模索している学校においても使えるような、汎用性のあるものにしていくこともできるのではないだろうか。

(附属中高 国語科)

おわりに

教育実習に限らず、教育実践の成果をどのように「共有化」していくのかということは、私たち教師に共通する課題である。その単元や授業において果たされたことを記録するというだけにとどまらず、単元や授業を実践することにかかわった者が、当の実践をどのように見つめ、捉えているのかということ記録し、それをもとにして考察をおこなっていくことは、その次の実践を進めていくために多くのことをもたらすだろ

う。本稿は教育実習に焦点を当てたものであるため、主として教育実習の成果を教育実習生にどのように自覚化・意識化させていくのかという問題を扱った。が、教育実習指導だけにとどまらず、教師教育にかかわる重要な知見を明らかにすることができたと考える。

教育学部の「国語科学習開発論」（5セメ）における模擬授業の際に次のようなことを伝えている。

「模擬授業では、多くの人が「学習者」の役割を果たしながらその授業に参加することになります。ですが、学習者の立場に立っているばかりではなくて、その授業を進めている当事者（教師役の人）の立場に立ちながら、その授業に参加してみてください。二重の視点で授業に参加するということをそれは意味すると言ってよいのかもしれませんが。（中略—引用者）

授業者として模擬授業を行った人は授業を進める経験をしたということになります。「学習指導案」として考えていたことの実現にどのような困難さがあるのかということ、「模擬」ではあってもある程度知ることができたのではないのでしょうか。もちろん、教育実習で実際の生徒を前に授業することと模擬授業をすることとの間には、かなり違いがあるはずですが。この模擬授業で上首尾にことが運んだからといって、それが中学校や高等学校の教室でそのまま通用するというわけでもありません。しかし、指導案というかたちでプランを立て、学びをデザインすることを行っているか行っていないかで大きな違いがあるということにも、気づいたのではないのでしょうか。プランがあるからこそ、何が問題なのかということを考える手がかりがもたらされるはずですが。

授業者とならなかつた人たちも、他の人の進める授業の学習者としての体験をすることによって、さまざまなことを考えたのではないのでしょうか。先ほど二重の視点という言葉を使いました。この模擬授業の学習者役の人たちは、完全に学習者になりきれない学習者であったかもしれません。授業者の立場にも立つ学習者とでも言ったらよいのでしょうか。この二重の視点を持つことが、模擬授業に取り組んでいく上では重要なことであると思います。なぜなら、実際に教師として学習者のことを考えるということは、そのことの裏返しのようなことだからです。学習者の研究は、教師の立場を離れてはありえません。「模擬」学習者として授業を体験することは、たとえば「このようにきかれたら、学習者はこんな気持ちができるんだ」といったこと

を体験することでもあります。そのようなことを「模擬」学習者として体験することは、教壇に立って実際の学習者に向かうときに、自らの内部に「仮想の学習者」を持つことにつながるはずですが。模擬授業に、授業者としてでなく学習者として参加することにはそのような意義があります。（2004年度「国語科学習開発論」講義資料より）

大学では同じ講義を受講している者同士での「模擬授業」を営むこともある。しかし、「模擬授業」と教育実習とではさまざまな局面での違いがあることは確かだろう。しかし、引用した「国語科学習開発論」の講義資料の中で強調したのは、教師として授業を進める際に教師としての自らと「仮想の学習者」との「二重の視点」を持つということであった。「自己評価録」に記されてあったことは、そのことの実践であったと言いうことができるだろう。

「学習指導案」に反映された授業の「プラン」や「デザイン」がどのように実現されたかされなかったのか。「指導シート」「記入シート」とはそのことを確かめていくための場であるように思われる。これは、すぐれて「反省的(reflective)」な行為だ。そして、教育実習であるだけに、その「反省的」な行為に他の実習生や指導教員がかかわっていくことができるなら、教育実習の際に、各々の教育実習生にどのような変容が生まれたのかということをつかえることができる。

もちろん、その変容がいつも劇的である必要はないだろう。むしろ、書き記したことをもとにして、自らの教師としての実現を見きわめていくということが可能になるということにこそ、「指導シート」「記入シート」を工夫する意義があると思われる。

同じく「国語科学習開発論」の最終回において、毎年「授業をつくるための140項目」という一覧を配布し講義のまとめをおこなっているが、これは稿者自身が教育実習の際に同じ実習生の仲間と作ったものを改訂したものである。教育実習に臨む際に心に留めておいたらよいと思われることを短い言葉で表現し、それを集めたものである。「指導シート」「記入シート」を工夫し、そのようなかたちで実習生の皆が共有できるものを作っていくことができれば、実習を進めていくための支えの一つになるだろう。今回の試みはそうした教育実習を進めるための共有財産を形成していく試みにつながるものである。

（山元隆春）